

特別対談 これからの資産運用について

日系証券の系列投信会社でファンドマネージャーなどを経て、1994年以降フランス系、スイス系2つの証券にてストラテジスト。現在はピクテ・ジャパン株式会社にて、情報発信を行っているシニア・フェロー市川眞一氏と対談を行いました。(2024年7月8日時点)



ピクテ・ジャパン株式会社
シニア・フェロー 市川 眞一氏

吾郷 年後半に米国大統領選も控えていますが見通しや資産配分についてどのようにお考えですか。

市川 昨年からは米国ハイテク企業を主として半導体分野の投資拡大期待が世界の株式市場を牽引しています。幅広い年齢層で米国、特にハイテク企業を多く組み入れた銘柄でポートフォリオを構築している方が多いと感じます。一方、日本市場においても東証の市場統治改革に沿って多くの上場企業はPBR改善を意識した業績拡大努力や株主還元などを積極的におこなっており、海外の投資家を中心に再評価する機運が広がっています。目先の日米金融政策の動向と米大統領選挙による不透明要因はありつつも、これまでの成長・



ワイエムライフプランニング
代表取締役社長 吾郷 寛之

株高は、調整を交えながら継続すると考えられます。

吾郷 難しい局面ではありますが、中期の視点から考えても過度に米国比率が高いポートフォリオは再考する必要はありそうですね。

市川 資産背景や投資方針を加味せず考えると、米国市場を軸としながらも、市場評価が高まりつつある日本市場や人口増加による成長が期待される新興国市場を組み入れ、分散を意識する方法も良いと思います。

吾郷 金融機関側としても、資産全体を俯瞰したポートフォリオ提案は重要だと考えています。そのために、お客さまに保有資

産の確認、気づきを与えるきっかけが必要で、商品購入後のアフターフォローはさらに重要な役割になります。

市川 そうですね。新NISAを契機として資産運用を新たに始める方も多く、投資マインドとしては非常に高まっていると感じます。中期を意識したバランス運用、環境変化等に対応した情報提供に加え、お客さま自身の投資方針に沿っているかどうかをしっかりと確認する必要がありますね。

吾郷 金融機関の担当者は、商品購入時だけではなく、継続的なアフターフォローをすることでリスクリスク許容度や経済状況の変化に気づくことができ、リバランスやリアルケーションの提案にもつながりますし、そういったやり取りを重ねてお客さまとの間に信頼関係が生まれます。そこから、金融商品以外の様々な相談につながっていくということを今一度意識しておきたいですね。